

Marek Nekula und Walter Koschmal (Hrsg.):
Juden zwischen Deutschen und Tschechen. Sprachliche und kulturelle
Identitäten in Böhmen 1800-1945.

佐々木 茂 人

ドイツ人とチェコ人の間に立つユダヤ人——「プラハのドイツ語文学」に少しでも関心をもつ者ならば、一度は耳にしたことのあるフレーズであろう。今日では言い古された観のある布置だが、これが批評家や研究者の口の端にのぼるのはようやく戦後のこと。アイズナー〔英訳版 1950〕の古典的な図式（三重のゲッター）あたりが初出であろう。潜在的には 1848 年以降ならあり得た議論だとも思われるが、プラハのシオニズムがもっとも伸張した第一次大戦前夜でさえ、ユダヤ系は「ドイツ文化の砦」、プラハもせいぜい「ユダヤ系のコロニー」と評されるにすぎなかった〔Das jüdische Prag 1917〕。それが、カフカ・ブームによって、あたかも世紀転換期のプラハを象徴する言葉のごとく祭り上げられ、ブームが沈静化するや、今度は時代の遺物のようにみなされた。だが、果たしてこの短い言葉の内実がきちんと議論されたことはこれまでであっただろうか。

この布置をタイトルに掲げた本論集——同じ題目による 2003 年 4 月レーゲンスブルク大学で催された国際会議にもとづいたもの——は、ユダヤ人の同化をめぐる議論が戦わされた 1840 年代から、チェコスロヴァキア第一共和国末期までを収めた広いスパンで、二つのエスニシティの間に立つユダヤ人のあり様を今一度捉えなおそうとしている。1980 年代の同種の論集〔Seibt 1983〕は概説的な歴史記述に偏るきらいがあったが、本論集では各論者が歴史や社会という大きなスタンスに立脚しつつ、主眼はあくまで個別のテーマにおいている。「三月前期」のユダヤ人の社会的状況をおさえながら、チェコ・ジャーナリズムで巻き起こった同化論論争をたどるマイドゥル、自らのルーツにボヘミアのユダヤ人の生活史を重ねてみせたイグガース。彼らの論考はその格好の例であろう。なかでも、ドイツ自由主義学生組合「朗読と講演のホール」を取り上げたチェルマークのものは、近年注目されるプラハ・ドイツ自由主義の系譜〔三谷 2006〕をたどったものとして見逃せない。カレル大学に次ぐ蔵書数を誇る「朗読ホール」、ハオプトマンやラータナウといったドイツの著名人を「名誉会員」に擁する「講演ホール」は、いわばドイツ系の「諸民族の春」を冷凍保存する機関であった。ズデーテン地方の急進的民族主義を押さえ込むの

に腐心した一世紀足らずの活動の軌跡は、得てして否定的に捉えられがちな「プラハ・サークル」の親世代の再考を迫るものだ。

ドイツおよび日本のゲルマニストにはアクセスしにくい資料を利用した、チェコスロヴァキア第一共和国時代に関する記述が厚いのも本論集の特徴である。カレル大学の在学記録と法学の専攻学生数をもとに、共和国成立以前と以後のユダヤ系学生の動向を調べたペシェク、ボヘミアを地域ごとに分類、各地の新聞および雑誌記事をもとにユダヤ系のアイデンティティを再構成したチャブコヴァー、ナチス・ドイツ誕生という事態にユダヤ系がどのように向きあったのかを、シオニスト、チェコ系ユダヤ人、ドイツ系ユダヤ人、それぞれの動態から提示したクレイチョヴァー。チェコ語文献の援用は、おそらく今後の「プラハのドイツ語文学」研究の主流になるだろうが、使用する文献と論考の学問的意義が比例関係にないのは言うまでもない。チェコ語とドイツ語とヘブライ語を操り、一時はハシディズムに帰依したイジー・ランガーを題材にしたトゥウルディークとコシュマルの論考のごとく、伝記的事実の羅列に陥ったり、言語的アイデンティティという議論の前提がそのまま結論になるようでは一次資料が生きてこない。民族対立の焦点となったヒルスナー事件、ヴァーグナーはその事件へのスタンスをカフカの創作から探ろうとするが、事件の調書とカフカのテキストとの関連箇所を執拗に抜き出す手法は牽強附会のそりをまねがれない。

かつてビンダー [Binder 1991] は、「カフカの陰に隠れた詩人」と銘打って忘れられたユダヤ系作家を掘り起こし、その衣鉢を継ぐようにスペクター [Spector 2000] は「プラハ・サークル」の周縁に位置する作家たちの作品を読み解いた。ノーシーが冷笑を交えて述べるように、生前のカフカは無名とは言わないまでもメジャーな作家とは言いがたかった。当時のユダヤ系知識人の趨勢を知ろうとすれば、まず忘却の淵に沈みこんだ人々を蘇らせなければならない。この論集では、キルヒヤーが、ニーチェ、ベルネ、オットー・グロースの影響を受け、精神分析をユダヤ文化に応用したアントン・クーを、ノーシーが、境遇もユダヤ性に対するスタンスも対照的な二人の女流作家ミッツィ・ハネルとマリー・ギビアーンを、ゼルケが、ペトロ・キーンとペーター・キーンという二つの名前の中で揺れ、ナチスにガス殺された画家にして詩人であった人物を、それぞれ新たな資料と共に紹介している。マックス・ブロートにも復権の兆しが見える。ツィンマーマンはブロートの小説を網羅的に読解してチェコ系へのスタンスを「遠距離恋愛」と同定、一方、音楽批評や音楽家に宛てた手紙を手がかりにするシュラームコヴァーも、ブロートの多才とチェコ文化紹介の実績を強調する。だが、影武者ヤン・レーヴェンバッハをチェコ系とのパイプ・ラインに利用したブロート、自分の美学に沿わなければリブレットに手を加えることさえ厭わない「父権的な」ブロート——そうしたブロート像を導き出しながらも肯定的な総括をする後者の議論を見ていると、ユダヤ系知識人の評価における推移に思いを馳せざるを得ない。

ドイツ人とチェコ人の間に立つユダヤ人——この命題に各論者が個別のレスポンスをした結果、論集は全体としてモザイクにも似た雑然たる様相を帯びている。これを編者の責任に帰すのは容易いが、「同化」「シオニズム」「社会主義」などの一連の語句に回収しがちだった従来の言説を脱する過渡期の現象と評することもできよう。惜しむらくは、「間に立つ」ユダヤ系を依然として「媒介者」で片付けてしまう向きがあることだ。ネクラでさえ、モノグラフ [Nekula 2003] の成果を踏まえつつ、言語が民族アイデンティティの指標としては限界を有し、ユダヤ人のディアスポラに付随する多言語的な次元への視座を提示すると論を結んでいる。「媒介者」という見方がいかに当該の布置を局限化していることか。カフカの姪マリアンネ・シュタイナー（オットラの娘）が所収のインタビューで言明しているように、故郷がユダヤ人を選ぶのではなく、ユダヤ人が自ら故郷を、しかも複数の故郷を選んできたのだ。反ユダヤ主義とその行き着く先であるショアーがユダヤ人の近代であるのは言うまでもない。だが、意志を持ったES細胞しながら、移動した先々で巧みにアイデンティティを獲得した軌跡もまたユダヤ人の近代ではなかっただろうか。「間に立」ちながら複数性を実現したユダヤ人をどのように評価するか——本論文集は新たなプラハのユダヤ人研究の幕開きを告げている。

(München: Oldenbourg 2006)

参考文献

Binder, Hartmut (Hrsg.): *Prager Profile. Vergessene Autoren im Schatten Kafkas*. Berlin 1991.

Das jüdische Prag. Eine Sammelschrift. Hrsg. v. der Redaktion der „Selbstwehr“. Prag 1917.

Nekula, Marek: *Franz Kafkas Sprachen. „...in einem Stockwerk des inneren babylonischen Turmes...“*. Tübingen 2003.

Seibt, Ferdinand (Hrsg.): *Die Juden in den böhmischen Ländern*. Wien 1983.

Spector, Scott: *Prague Territories. National Conflict and Cultural Innovation in Franz Kafka's Fin de Siècle*. Berkeley / Los Angeles / London 2000.

バーヴェル・アイスナー『カフカとプラハ』（金井裕／小林敏夫 訳）審美社 1975 年。

三谷研爾『プラハ・ドイツ人社会における文化的アイデンティティの形成と機能』（2003-2005 年度 科学研究費補助金 基盤研究C 研究成果報告書）。